

シンポジウム「メディアとLGBT“ホモネタ”って笑っていいの？」実施報告

性の平等に関する委員会委員 片岡 麻衣 (64 期)

1 本シンポジウムについて

2017年2月21日、弁護士会館にて、性の平等に関する委員会セクシュアル・マイノリティ・プロジェクトチームの主催により、掲題のシンポジウムが開催された。

本シンポジウムは、インターネットやテレビ、新聞、雑誌等のメディアにおいて、同性愛者やトランスジェンダーなどのLGBTを含むセクシュアル・マイノリティ（以下、字数の都合上「LGBT」と統一する）が笑いの「ネタ」として扱われるなど、差別や偏見を助長する取り上げ方が未だになされ続けていることから、現状の問題点と今後の改善策を検討することを目的としたものである。

パネリストとしては、「シノドス」編集長で評論家の荻上チキ氏、タレント・文筆家の牧村朝子氏、「BuzzFeed Japan」記者の渡辺一樹氏と、メディアにおいてそれぞれの立場で活躍中の3名をお招きした。当日の参加者は、会社員や学生などの一般の方を中心に150名という多数に上り、会場は熱気に包まれていた。

2 シンポジウムの概要

冒頭、当委員会の寺原真希子委員による基調報告が行われ、メディアにおける差別や偏見の根深さについて問題提起がなされた。これを受けて、当委員会の上杉崇子委員をコーディネーターとして、上記3名のパネリストによるパネルディスカッションが行われた。

牧村氏は、レズビアンであることをカミングアウトしたタレントとしてメディアに登場している自身の経験から、LGBTが「笑いの対象」として娯楽番組に登場するか、「配慮の対象」として福祉番組に登場するかのいずれかしかならない現状への違和感や、番組の制作現場が時間に追われており、伝え手の側が正しい知識を持つことが困難な状況にあること等、特にテレビの世界における問題点を紹介した。

荻上氏も、以前と比べればメディアはLGBTに対する差別に自覚的になってはいるものの、未だ無理解な人も多いとした上で、差別的な扱いに対し「それは違う」と言える人

がメディアに登場することが大切であるとの意見を述べた。

また、渡辺氏は、ある政治家の政治活動上の疑惑の取材中、その政治家



がゲイであることが分かった際、性的指向まで社会に伝えるべきかどうかを慎重に検討した結果、記事では取り上げなかったというエピソードを披露し、何人かの記者や編集者によるチェックを経るなど、メディア側がブレーキをかけられる体制を整えるべきではないかとの意見を述べた。

ディスカッションの最後には、メディアが変わっていくための方策として、牧村氏から、LGBTであってもそうでなくても、思ったことを言える状況を作ることが大切であるとの意見が出された。また、渡辺氏は、LGBTの結婚式や幸せな日常などについて積極的に情報を発信することで、子どもたちを含む受け手に「自分らしい生き方でいいんだ」と伝えて行きたいと述べた。荻上氏は、セクシュアリティが人を分類する「カテゴリー」と捉えられるのではなく、例えば「鉄道好き」などと同じように、その人の一部分である「タグ」のひとつに過ぎないと捉えられるようになるべきではないかと述べた。

3 総括

本稿ではごく一部しかご紹介できなかったが、パネリストの方々からは、知識と経験に裏打ちされたメディアに対する様々な意見が出され、白熱した議論が展開された。アンケートでもほとんどの参加者から好意的な評価を頂き、今後もLGBTの人権について勉強したり意見交換をする場を設けて欲しいとの要望が多数出された。当委員会としても、引き続きLGBTに対する法的支援に取り組むとともに、一般の方々と一緒に考えることのできる場も設けていく所存である。